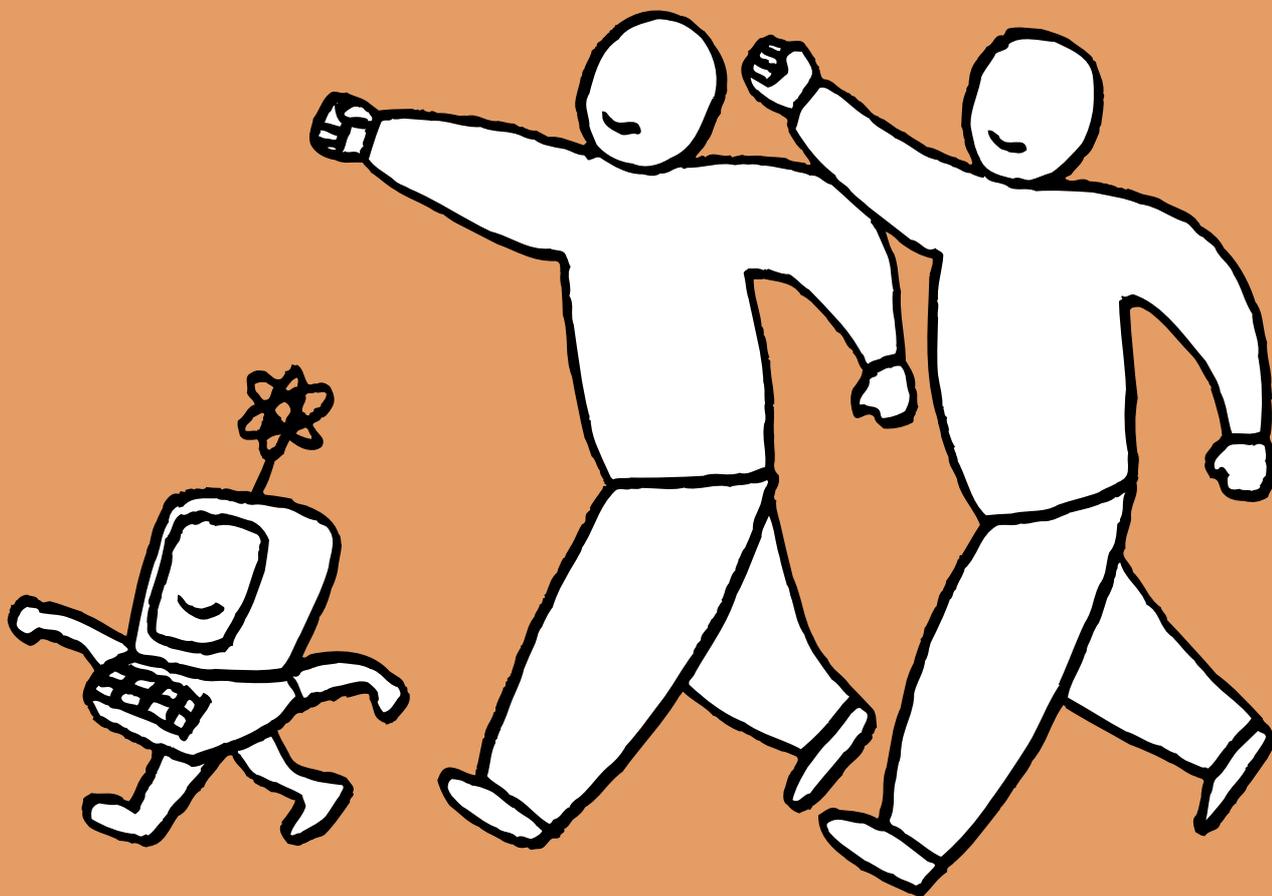


Mellow Symposium

メロウ・シンポジウム2003

[報告書]

「シニアが主役!! 時代を変える」
～シニアの知と技が生きる～



■開催日：平成15年3月7日(金)

◆シンポジウム 13:00～17:00 有楽町朝日ホール [有楽町マリオン12階]

◆展示体験コーナー 10:00～18:00 朝日ギャラリー [有楽町マリオン11階]

■主催：財団法人 ニューメディア開発協会

■協賛：財団法人 健康・生きがい開発財団

財団法人 自由時間デザイン協会

日本ウエルエージング協会

社団法人 ビューティフルエージング協会 50音順

財団法人 シニアルネサンス財団

社団法人 長寿社会文化協会

社団法人 日本テレワーク協会

■後援：経済産業省

■協力：財団法人 ニューメディア開発協会賛助会員 企業・自治体





「シニアが主役!! 時代を変える」

～シニアの知と技が生きる～

自らが切り拓いていくという姿勢、

「知と技」という経験を生かす勇気と実行、

実現、実行されている方々に有益なヒントや示唆をいただきます。

実践的立場からの提言

- 世代間交流から高齢者の「生きる喜び」を追求
- ITプラットフォームでシニア支援
- シニアの力で海外協力
- 伝統文化の保存と継承
- 地域ボランティアにかける思い

目次

C O N T E N T S



4 主催者挨拶

岡部武尚(財団法人ニューメディア開発協会理事長)

6 来賓挨拶

松井英生
(経済産業省大臣官房審議官商務情報政策局担当)

8 基調講演

「大老年」

三浦朱門(作家)

17 パネルディスカッション

「地域で光る

シニアの力」

～いかに生きるか・知と技～

コーディネーター

加藤 栄

(日経BP社『日経マスターズ』編集長)

パネラー(50音順)

●世代間交流から高齢者の「生きる喜び」を追求

今中兵一

(福岡県飯塚市学習ボランティア派遣事業事務局長)

●シニアの力で海外協力

中城茂登子

(財団法人日本シルバーボランティアズ指導員)

●伝統文化の保存と継承

中村宗哲(漆芸家・千家十職塗師)

●ITプラットフォームでシニア支援

堀池喜一郎

(NPOシニアSOHO普及サロン・三鷹代表)

●地域ボランティアにかける思い

牟田悌三

(俳優・社会福祉法人世田谷ボランティア協会名誉理事長)

42 展示・デモ・体験コーナー

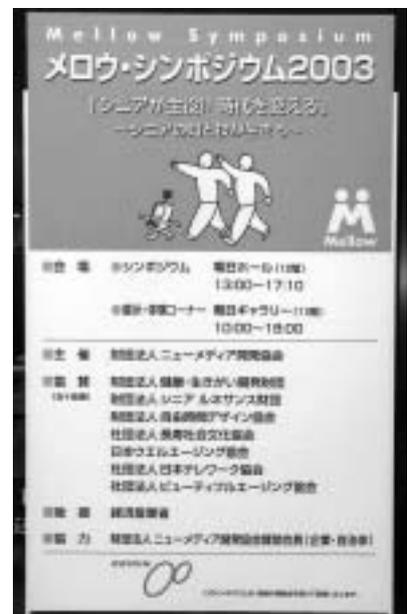
54 制作物一覧

56 ホームページ



平成15年 3月7日 金曜日
 春の嵐の中、多数の方々にご参加いただきました。

昨日から続くみぞれ混じりの雨の降る有楽町。
 開場へむけて準備が整えられていた。





スタッフが待つ中、
いよいよ開場、
参加者がぞくぞくと
入場受付に



だんだん会場の席がうまっていく。



一方、



出演者の皆さんは、シンポジウムの進
行、パネルディスカッションなどの打ち
合わせ。

午後1時、
開会が告げられた。



主催者挨拶



シニアが主役!! 時代を変える

～シニアの知と技が生きる～

財団法人
ニューメディア開発協会理事長
岡部 武尚

皆さまこんにちは。ニューメディア開発協会の岡部です。本日はあいにくの天気、雨で寒い中、大変多数の方々のご参加を頂き厚く御礼を申し上げます。このメロウ・シンポジウム2003という催し物は、円熟した素晴らしい社会をつくろうではないかという構想で、経済産業省が平成2年から進めているメロウソサエティ構想推進の一環として開催している事業でございます。

我が国では、高齢化の波が急速な勢い進んでおりまして21世紀になって、かつて世界一の高齢化国家でありましたスウェーデンを抜き、日本が世界で一番の高齢化国家になったと聞いております。そういう中で少子高齢化がどんどん進んでいるわけですが色々な問題が出てきているわけでありませう。

一方、日本の経済をみますと、ご承知の通りデフレの不況ということが非常に深刻な状況になっておりまして、このまま我々が目指す豊かで過ごしやすい環境を国が維持できるかということが危惧されるところであります。そういう中で少子化ということで就業人口もこれからどんどん減ってくるわけですが、何とか以前のような明るい国家をつくりたいと政府も色々な施策を展開しているわけですが、何せ就業人口が減るとことは国の活力がどんどん損なわれるということになります。

そこで、ぜひシニアの皆さま方に再び現場の第一線に立って頂き、ご活躍をして頂く必要があるのではないかと、これからのよい社会を再構築するためには、シニアの皆さま方の力こそが重要ではないかというふうに考えているところであります。皆さま方がかつて職場でご活躍された時代に培ってこられた知恵、知識、知能、さらに育まれた技術、技能、それらを包含した色々な経験をこれからいかに活かしていくかという事が経済、産業、国を活性化させる非常に重要な要素になるのではないかと

考えております。

そういう意味で、本年のメロウシンポジウム2003におきましては「シニアが主役」～シニアが時代を変える～ということをキャッチフレーズとして、皆さま方と一緒に議論していきたいと思っております。本日は、経済産業省大臣官房審議官松井様はじめ、基調講演では元文化庁長官を経て現在、日本芸術文化振興会会長、日本芸術院会員でいらっしゃいます三浦朱門先生、そして6人のパネリストの方々にご参加頂いております。諸先生方のお話しをお聞きいたしまして、これからの住みやすい円熟した、いわゆるメロウ社会をつくっていくということについて皆さまと議論していきたいと思っております。本日は、この下の11階に、この事業のためにご協賛ご協力頂きました企業・団体の方々がいりるるな展示・体験コーナーを設けております。途中30分位時間をもうけてありますので、ぜひご覧になるなり体験するなりして頂きたいと思っております。本日は半日とい



う短い時間ではございますが、有益な成果が得られますよう期待いたしまして開会のご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。



来賓挨拶



シニアが主役!!
時代を変える

～シニアの知と技が生きる～

経済産業省大臣官房審議官
商務情報政策局担当

松井 英生

ご紹介いただきました松井でございます。このメロウ・ソサエティは65歳以上の方の集まりということで、私はちょっと若輩です。先にご挨拶されました岡部理事長様はお若く見えますが還暦なそうで、私は50歳は過ぎておりますがそういう意味で若輩ですが、必ずいつかは皆さま方のお仲間に入れて頂けるものと思って大変楽しみにしています。むしろ、これからその世界に入る者達が、このメロウ・ソサエティをどういうふうにしていくか真剣に考えることこそ重要ではないかと思えます。

私自身、学生時代いくつか趣味がございまして、どうも仕事をしているときはなかなかそういう趣味が出来ません。メロウ・ソサエティに入った時にぜひやりたいという夢が沢山ございます。そういう意味で、シルバー、シニアとは、私自身の輝ける夢を実現する素晴らしい時代だと思っています。シルバーではなく、ゴールドンドリームの時代と位置づけています。

私は、石原裕次郎や加山雄三さん、VANとかJUN、女性ではJ&Rとか、そういう華やかな時代を子どもの時から見ていました。先日、日経BP社のマスターズという本があり拝見していると、そういう時代を謳歌された方々が、また、おしゃれで華やかな生活を享受され、豊かな生活を送られている方々が沢山おられるのだということを実感させられました。私も将来そういう多くの仲間ができるのだと大いに喜んだ次第です。

経済産業省なので、もっともらしい事を申し上げたいのですが、先程、岡部理事長の方から、経済社会の活性化のためにこの世代が重要である、とほぼ根本的なことをおっしゃったのであまり細かくは申しませんが、やはり今我が国は自信を失っていると思います。これはあまりにも欧米的なものを入れすぎているのではないか、グローバルスタンダードとってアメリカスタンダードを入れて、その上で

苦労している。日本にとって一番大事なものを忘れかけていると思います。伝統とか、歴史、文化とか、それをもっと大事にして、全面に打ち出していくべきではないかと思っています。

数年前にそういう問題意識で伝統的産業振興法を改正いたしました。伝統的工芸品が非常に重要なものということで法律で支援しているのですがどううまくいってない。このままでは先細りで倒れてしまう、どういう形で振興するかという観点で法律改正をしたわけです。細かく申し上げませんが、温故知新をもじって温新故知などといっていたのですが、古いものだけに偏っては駄目だ、新しいものをうまく取り入れて伝統をさらにのばしていく必要があるのではないかというような問題意識で法律改正をし、更なる発展を期待しているところです。そういう日本的な良さ、伝統をどんどん出していけないと、今、中国をはじめ隣国はどんどん発展していっています。それに伍して、日本の良さ、強さ、経済力をどんどん発揮して行かなくては駄目ではないかと思っています。そのためには、まさしく皆さま方がかつてから伝統を背負ってこられた方の叡智、知識、人脈が物凄く重要になってきます。

加えて、そういうものを非常にうまく実現する新しい手段としてITというものがあります。ITをうまく活用すると全ての方が社会に参画し貢献をし、また、ネットワークを組んで、その力を更に何倍にも伸ばしていくことができると思います。只今の問題は、ITが非常に使い勝手が悪いということです。

ユビキタスという言葉をご存知かと思います。ラテン語でどこにでもある、点在するという意味ですが、新しい今後のIT社会をユビキタス時代——どこでも、誰でも、何時でも、アクセスできるという新しい社会がIT技術によって実現出来るということで、今IT政策を進めています。ところが「どこでも」「いつでも」は実現できるのですが、「誰も」がまだ



出来ない。家電製品は買ってきてすぐ使えますが、パソコンを買ってきて立ち上がらせるのは非常に難しいわけです。私自身、携帯電話も買ったのは非常に早いのですが、Iモードなどは使わないで普通の会話だけでしか使っていない。つまり、何か機能があってもほとんど使いこなせていないわけです。しかも、取扱説明書は分厚くて読む気はしない。

確かに技術が進み、良い機能のものをより安くということが日本の経済を支えてきたことはわかりませんが、使い勝手の良さということも大事で、誰でも使いやすいという、そういう方向性が望まれているのではないのでしょうか。それが、皆さま方の社会参画に大きく貢献するものではないかと思っています。私どもは、現在その方向で政策に努めています。

いずれにしても2010年に国民の4分の1近くが65歳、所詮メロウ・ソサエティに入るわけですが、その活力こそが我が国の大きな活力になるものと思います。ぜひ皆さま方の力によって明るい日本経済社会を生み出してゴールデンドリームを実現して頂けるよう期待しています。よろしく願いいたします。

基調講演



大老年

作家

三浦朱門

1926年東京生まれ。48年東京大学文学部言語学科卒業。以後日本大学芸術学部で教鞭をとり、69年教授を退職。85年には文化庁長官に就任、翌年辞職。現在、日本芸術文化振興会会長、日本文芸家協会理事、日本芸術院会員、テレビ朝日放送番組審議会委員、三浦学園理事、中部大学客員教授を務める。67年『箱庭』で新潮文学賞受賞。70年にはローマ教皇庁より聖シルベスト勲章受賞。83年『武蔵野インディアン』で芸術選奨文部大臣賞受賞。その他恩賜賞、日本芸術院賞、第14回産経正論大賞を受賞し、99年には文化功労者となる。主な著作は『冥府山水図』『犠牲』『若葉学習塾』『にわか長官の510日』他多数。

三浦でございます。只今、松井審議官が矛盾した問題、しかも大変重要なことをおっしゃいました。そのひとつは日本の伝統工芸は滅びつつある、これは何とかしなければならない。もうひとつは普遍的なIT技術をもとにする極めて今日的な機械を如何に育てていくか、そうした矛盾を抱えて、日本の将来はどう有るべきかという、こうした問いかけをなさったのだと思います。

私が思いますのは、この難しい問題を解決しなければならないのは65歳以上のシニア達の仕事ではないかと思えます。何故かという、この矛盾しているものの基本にあるものは生物、動物としての生き方です。

いま65歳以上を老年としますと、1938年頃生まれ以前の人から老人になってくるわけですが、この老人の世代の人は、生まれてから、まもなく戦争の中にあります。小学校に入った頃は日本の国は神の国で日本は絶対に勝つのだと言いきかされて育ち、それがあつた時、戦争に負けて、日本がいままでやってきたことは悪いことなんだ、と全然違うことを教えられたわけです。米軍に占領され講和条約ができましたが独立したかどうかははっきりしない。そのような鬱屈した気持ちが左翼的思想と一緒にあつた60年安保というものを経験したわけです。しかし、我々は飯を食わねばならないわけで、現在は65歳になる人の親の世代の人たちが一生懸命働いて何とか飯の食える時代になつた。そしてそれどころか日本は世界一「Japan as No.1」といわれる時代を経験する。そうかと思うと急転直下、日本はどうにもならないなどという悲観論ばかりで、この10年ばかり行き詰まっている。つまり、私達老人は、天国と地獄を知っているのです。

私は大正15年生まれです。最後の2ヶ月位軍隊経験をしました。私から10年位前、即ち大正5年、1916年生まれ位の人から以降の人が今何とか生

きのびて意識も、体もはっきりしている限界ではないかと思います。そうした人達が現実の老人であろうかと思います。この人達は戦前の日本を知っている。それは昭和13年生まれの人についても戦前の日本というものの匂いを知っている。また、戦後の黄金時代も、自分達の世代の仕事として作り上げてきた。こういう経験を持っている世代というのは実は大変頼もしい時代です。

私達のそれにあたる時代とよく似ているのは、例えば、慶応大学を創った福沢諭吉先生の時代です。福沢先生は「自分はひとつの生涯でふたつの時代を生きた気がする」ということを言われている。明治以前の旧幕時代のちょんまげを結っていた時代の日本と、それから文明開化以降の近代化を目指した日本と、ふたつの時代を経験したということであろうかと思います。

その世代と今の老人の世代と大変よく似ています。福沢先生の時には徳川体制というものはまだ中身はボロボロだが表向きはまだしっかりしている。そして、日本は神の国である、そしてアメリカとかイギリス等がくるのはけしからん、追い払ってしまえ、今の政府はだらしがないから、天皇陛下を中心にしてまた新しい政府をつくらう。これはある意味では1920年(大正10年)頃からの日本とよく似ている。日本の一種のナショナリズムが強くなりまして、国際連盟などが日本のやり方に文句を言うのはけしからん。中国大陸には我々の真心を知らない、言うことを聞かない、けしからんやつがいるから、あそこを征服して本当の意味の東洋平和をつくってやろう。このような考え方というのは、幕末の尊皇攘夷とよく似ています。

ところが、尊皇攘夷というのは、例えば長州藩が関門海峡で外国船を砲撃したという事で4カ国に攻められてアッという間に上陸を許してしまいます。そして、大砲でも何でもとられてしまう。今でもパリ

のアンバリッドというところのそばにいきますと、長州藩がその時奪われた青銅の大砲が陳列されています。また、薩摩の島津藩では生麦事件というのを起こしました。藩主の行列の前を横切るのは、けしからんということでイギリス人を殺してしまう。そのためにイギリスの艦隊が鹿児島湾に入ってきて鹿児島市街を焼き払ってしまう。英国の艦隊としては目的を達してから引揚げたということでしょうが、薩摩藩としてはその時、たまたま日本側の大砲が当たってイギリスの軍艦が火を發した。慌てて錨を捨てて引揚げた。それを戦利品のような顔をして持っていました。しかし、彼等も欧米にはとてもかなわないことがよく分かった。それが明治維新のきっかけです。敗戦が日本の近代化のはじまりなわけです。

それで、明治になりまして、アメリカをはじめ英国などと条約を結びますが、対等の条約は結ばません。それは不平等条約です。勿論考えてみれば当然です。島津の殿様の行列の前を横切ったということだけで殺されたんじゃない。そんな人間達を相手にして対等の関係など結べるわけがない。当然不平等条約だということだと思います。

もう一つ、ごく最近出た本で面白いのは、佐藤雅美さんという人の書いた本で題は忘れましたが、明治維新の戦いで薩長藩が勝ったという裏には経済的な事情がひそんでいるという。つまり、英米側が幕府の経済的な無知につけこんで大もうけをしようとした。その策謀が失敗するということが、明治維新の戊辰戦争の原因だということを書いている。これも大変面白い。とにかく敗戦によって近代化しましたが、明治15年頃までは横浜の野毛山に英仏軍が駐屯していた。つまり、横浜にヨーロッパ人がいました。いつ何時、浪人というものが刀を抜いて殺しにくるか分からない。だから治安維持とい

うことで英仏軍が駐屯してしております。

築地明石町には寄留地というのがありまして、それは中国の上海とよく似ていますが、外国人が集って住んでいまして、自主的な体制をとっていた。つまり、そこには日本の法律が通用するようないような一種の植民地のようなものであった。それが明治15年頃までの現実だと思えます。そこで日本は奮起いたしまして、先ず武力、戦争に勝てるようにするというので、全国民に徴兵令をしきまして、戦争のための装備を整えた。あの頃の日本の軍隊は立派だと思います。例えば、明治18年に村田という、長州藩の元侍上がりの技術者が村田銃という単発銃をつくった。一発ずつこめるのですから速射能力からいっても物足りないところがありました。そこで、その数年後、村田連発銃をつくりました。それはアメリカのウインチェスター銃に似ていて、銃身の下にもう一つ銃身みたいなものがあって、そこに列車をつなげたような形で弾丸をこめて、バネで一発ずつ引き出して射撃するというやり方です。しかし、作りが複雑で不安があり暴発の危険がありました。それでも、日清戦争はこの村田の連発銃で戦いました。その数年後に1897年(明治30年)に三十年式という新しい連発銃をつくった。それを改良したのが三八銃です。

私がここでいいたいのは、明治12、18、30、38年の30年足らずの間にどんどん武器を改良していった、その当時の軍人達の努力です。福沢諭吉の時代で言いますと、自分達が尊王攘夷だ何だと世間のことも何も知らずに一人で偉そうな顔していた時代、そのおろかさを身にしみて知っている。このおろかさの結果、諸外国と不平等条約を結ばなければならなくなり自分達が植民地と同じような状態になってしまった。これは何とかしなければならない。そして、すぐれた軍隊もつくらなければいけない。そのような精神がありましたから、村田単発銃、連

発銃、三十年式銃、そして三八式銃と、4つの銃をわずか20数年間の間につくって兵隊に持たせた。それによって日清戦争、日露戦争を戦って勝った。しかし、福沢諭吉さんたちの時代はこれでほぼ終わってしまう。1910年(明治40年)で徳川時代に生まれ、何とかしなければならぬと思って活躍した人達の世代は終わってしまうわけです。

今日、私たちから見ますと、夏目漱石、森鷗外は偉大な文豪です。私も喜寿を超えたわけですけど、いま森鷗外などの歴史小説などを読みますと、なんとませた男なんだろう、50そこそこでこれだけのものを書いた、その老成ぶりには感心せざるをえません。ですけども、そのような人達は1915年頃に社会から退いてしまう。それから後の日本は段々悪くなっていく。最後の元老というのは、明治維新を経験した人達、例えば山形有朋達が日本の政治の表舞台から退くのは大体において関東大震災前後、1920年代のはじめです。その頃日本人の寿命は長くありませんから、日本が苦しかった頃、世界の弱小国であった頃を知っている人たちはほぼ死に絶えました。最後まで生きていたのは、西園寺という人でしょう。そういう人が一人や二人いたかといってどうにもならない。それからどうなったかという、皆さんがご承知の敗戦になるのです。

日本が第二次世界大戦をはじめた頃、昭和16年、その時の軍のトップというのは、陸軍大臣、海軍大臣。これは軍の行政官庁としての組織です。もうひとつ軍を動かしている作戦統帥を行っているのは陸軍では参謀本部、海軍は軍令部というところですよ。その時の陸軍大臣は東条英機(明治17年生まれ)、海軍大臣は豊田大将(明治16年生まれ)。陸軍の参謀総長が杉山元帥(明治13年生まれ)、海軍の軍営部の総長というのが長野修身という人で同じく明治13年。この人達が第二次大戦を動かした人と考えてよろしいと思います。

この人たちが生まれた時、明治13年～17年というのは、始めの頃はイギリス軍などがいたかも知れませんが、言葉がしゃべれるような少年時代の時には日本はアジア大陸で中国と戦って勝った。それで日本は大したものだ。長い間、中国を偉大なものだと思っていたがあんな国大したことはない、途端に偉そうな顔をし始める。そしてこの人達は日露戦争の時には下級の将校として日露戦争に参加しました。その時の日露戦争を指導した偉大な将軍達、大山巖、児玉源太郎、東郷平八郎達を仰ぎみて自分達もあのようになろうと若い将校として胸を踊らしたに違いない。それから後の彼らはよい時代しか知らない。日本は第一次大戦で戦いますがほとんど被害を受けずに、国際連盟ができますとその常任理事国となり、世界を動かす5つの国の一つになる。だんだん日本は態度が大きくなる。そこで戦争を始めてしまう。自分の実力というものを何も考えずに始めてしまうのです。

その間、明治10年代から30年代の20年代にかけてもっとも基本的な小銃を当時の陸軍は4度も変えている。ですけれども日露戦争に勝ってから第二次大戦をはじめるまで日本の陸軍は小銃を何も変えていない、三八銃一本で戦うわけです。基本的には多少戦車とかトラックとかを持つようになりましたが、大体において第一次大戦以前の武器で第二次大戦を戦ったということです。飛行機とか航空母艦というものを日本は独創的な使い方はしましたが、そういう個々のものを除きまして日本は日露戦争以降停滞していた。

この時、もし幕末を生きた時代の人がもう10年長く生きて、そして表から退いていいようとも、現役の若い人達に向かって、そんなことでは駄目なんだ、日本は一流国だといっているけどもそれは表札の大きさだけであって、実際の家はオンボロなんだ、そういうことを教えてあげる先輩が必要だった。と

ころが、そういう日本が苦しかった時代を知っていた人達は1920年頃に死んでしまう。そして日本の苦しいことを知らない人達が1930年頃から日本を支配するようになる。それが昭和前半の日本の悲劇を生んだと私は考えています。

先程、松井さんのお話をうかがっていると、審議官は本当に秀才ですが、東条さんも島田さん豊田さんも杉山さんもみんな秀才であったに違いない。だけでも秀才というのは問題を見事に解きけれども、その問題の持っているものの危うさに気がつかない。問題を想定できない。それはむしろペーパーテストの弊害であるのですが、日本の陸軍も海軍



も幹部の養成には厳密な試験で選抜し立派に教育したに違いない。それなのにあんなってしまったというのは、全く違う時代の体験がないからであると思います。私達、昭和13年以前に生まれた者達はそんな意味で戦前の日本を知っている。戦後の悲惨な日本を知っている。そのために歯を食いしばって経済と技術を開発して世界のトップクラスに持ってきたのは我々の世代の手柄だという自負を持っている。

しかし、問題は戦後に生まれた人達です。例えば昭和25年に生まれた人達は、子供の1～2歳の頃はまだ食料が充分でなかった。私達の世代は

彼らに一生懸命飢えを悟らせまいと思ってできるだけのことをしました。そして、彼等が気がついてみたら、日本は高度経済成長時代です。そして、アメリカと日本は戦争したことがあったの？どっちが勝ったの？というような、昭和40年頃の生まれからそういうトンチンカンな人



が出てきてしまう。それぐらい日本の戦後の経済、技術の成長は素晴らしかった。つまり、負けを知らない、成功のみを知っている世代という意味では、明治中期生まれで第二次大戦を指導した明治世代と大変よく似ているのが戦後の1950年代以降に生まれた人達ではないかと思えます。

このまま、かつての明治世代と同じ状況が繰り返されるとしますと、10年位のうちに日本は破滅することになります。多分幸いだと思えますが、現代の日本の場合には平均年齢が伸びていて、80歳位まで何とか体も頭もしっかりしている人達が出てきました。その人達があいつらは古臭いと言われながら、昔は本当に食物がなかったのだとか、燃料がない時には物置を壊して焚いたもののだとか各家庭ではそう言いながら、社会の中では今までのように経済、技術を広げればいい、良いものをつくればいいんだとかいう時代じゃないんだということを発言する世代が残っている。だから私たちはそこにひとつの希望というか、今こそ老人の世代が頑張らなければならないのではないか、という気がいたします。

松井さんが、日本の伝統的な工芸というものが破滅したということをおっしゃいました。例えば陶器とか漆とか、指物師という人たちがどんどん減ってきております。しかし、これは私たちだけのものでは

ありません。例えばごく最近まで、東南アジアでは、陶器などというものはせいぜい足でけとばすロクロや手でコネて陶器を作っていました。日本でいいますと何百年も前からロクロを使っていますが、その頃の東南アジアにはまだロクロが伝わっていないので手で丸い器のようなものを作っている。千利休という人

たちは、ロクロ、ようするに機械でつくられた、まん丸の、どこから見ても同じ形に見える機械的なものよりも手でコネたデコボコの茶碗の方がそれを作った人の思い、あるいは意図、夢があるからよいといって妙な茶碗を愛好するわけです。その頃のフィリピンでは、ろくな装置もない、むしろ彼らの持っているプリミティブな素朴なものの中に人間のあり方により近いものを見いだした、それがワビ、サビというものだと思います。

そういう意味で私は機械的なもの、松井さんはユビキタスといわれましたが、利休たちはそういう普遍的なもの、誰が作っても同じ形になるものを拒否して、手で作ったもの、人間の思いがこもったもの、ユビキタスでないたった一つしかないものに執着した。私たちの400年前の先輩というのは偉大だと思います。そして、今日、松井さんがいわれたように、そういう普遍的なもの、例えばIT、情報に関する技術などというものは世界どこへいっても同じ機械が通用するわけです。それとは違う、一つしかないものを作る。そういう工芸というものが大事なんだといわれるわけです。私は、そこに日本人のよさが残ってような気がします。

東南アジアでも伝統的工芸が駄目になろうとしています。今から40年前、フィリピンのマニラに行きますと、決して芸術品ではありませんが黒檀をレリー

ブしたものがありません。ところが今では、木を削って面倒な細工を作るより、原液をうすめて瓶につめて、つまり、コココーラを作って外国に輸出した方がいい。ビールを造って缶詰にして外国に売った方がいい。というように近代工業の方に向かおうとしている。インドネシアも同じです。つい20年ぐらい前までは黒檀で作ったテーブルがありまして、脚がルイ王朝時代のロココ調で猫脚になっている。テーブルのまわりにも彫刻があって、引き出しの中には隠し引き出しが4つも5つもあるというような手のこんだものを作っていた。それがだんだんいい加減になってくる。ラオスには昔から竹細工がありましたが、それもビニールに置き変わっていく。中国においても同じです。東南アジアの各地で伝統的な工芸というものはなくなって、そのかわりに機械で人手を使わずに作られるビニールの皿、ざる、あるいは大量生産の家具というものがどんどん増えていく。インドでもイランでも昔は非常に手のかかる絨毯をつくっていましたが、今では日本でもコンピュータでデザインを指定してどんどん機械が作っていく。しかし機械が編んだものは間違いはないが、人間味がない。そういうことを考えますと、一面においては普遍的なもの、ユビキタスなもの、IT的なものがあるが、またもう一面においては伝統的なものへの憧れがある。その間を埋めて調整を図るのが私達世代のひとつの使命ではないかと思えます。

1964年頃から国連で学力テストというものをしていきます。それぞれの国の学力のあり方を考えてそれぞれの国々の教育の参考にしようという目的があります。点数だけでいいますとはじめの頃は日本はトップでした。そしてガクンと悪かったのがアメリカ、オーストラリアとか、カナダ、スウェーデンという国で、何故悪いのかというと、オーストラリアなどいけば広いところで牧場をやっているとAという牧場

とBという牧場の間の距離が100Km離れているところがざらです。そういうところで子どもたちが50人、100人集まってひとつの学校で勉強するということが不可能です。そこでかなり前からテレビのない時代はラジオ、今はテレビで授業をしていたわけです。またスウェーデンのような寒い気候、零下20°～30°では、たとえ学校の近くであっても子供が学校に行くことは容易ではない。ジャック・ロンドンという1916年頃に亡くなったアメリカの作家がいましたが、零下40°の時に凍え死ぬ男の話を書いています。いくら防寒外套を着ていても皮膚がピリピリ痛い。手袋をしたまの手でマッチを擦ろうとしたが、その間に凍えて意識がなくなるという話です。アメリカ合衆国でも北の方の神父さんの話で、零下20°になると朝サイレンが鳴って、その日は学校が休みだったという。つまり、そういうところでは学校なんて行けない。だから子供の成績が悪いのは当たり前なんです。ことにアメリカには毎年、何万という移民がやってきて、その子供たちが英語もできないのに学校は受け入れねばならない。

一方、日本は狭い国ですし、山が多くて人間の住むところが限られている。どこにでも一学年50人、100人編成の学校をつくることは可能なわけです。少なくとも敗戦直後、大都市が焼けただけだった時代では、日本人はほとんど農村地帯、山村地帯に住んでいる。だから子どもたちが一緒に勉強でき、学力がよかった。日本人は勤勉ということもあり、始めの頃は日本は成績が良かった。ところが段々それに参加する国が増えてきます。日本は成績が悪くなってきますが、それでもトップクラスでした。どういう国が成績がいいかというと、韓国、台湾、シンガポール、香港。ヨーロッパでいいますと、チェコとかハンガリーなど旧東ヨーロッパ地域で、共産主義政権が倒れまして西ヨーロッパに追いつこうとしている国々。アジアでいいますと新しく近代

国家になろうとして先進国に追いつこうとしている国が成績がいい。

日本の子供の成績を0点から百点までの点数を横、それぞれの点をとった子の人数を縦のグラフにしますと、日本の子供の成績はテーブル型です。点の低い人は少なく急に上がっていき、それからずっと横這いで、点のいい人がまた急にググッと下がる。テーブル型は落ちこぼれも少ない、しかしまた、成績のいい人も少ない。それが日本の学力テストの成績です。

アメリカはどうかというと、はじめはテーブル型に近いのですが、点の上位の人の数が次第に減りながらも富士の裾野のようになっている。日本に比べると中の上は少ない、しかし、上の上は多い。日本というのは落ちこぼれを無くす努力をしてきましたが、同時に英才というものを冷遇してきました。アメリカはいまでも学力テストはよくないけれどもノーベル賞をとるのはほとんどアメリカです。出来ない子も多いけれど出来る者も多いのがアメリカです。出来ない子は少ない、しかし、ずば抜けた子も少ないというのが日本です。

私は、日本人の教育の基本的考え方は、ずば抜けた人のためではない、そして特に劣った人のためではなく、ごく普通の人のためであると思います。例えば、コンピュータというものが出てきた時に、まず、日本人はワープロというものを作りました。日本人にタイプライターというものは馴染まないといわれていましたが、とにかくそれに代わるものを作る。あるいはそれにちょっと手を加えると出版社しかできなかった本というものをワープロを使うことで誰でも出版することができる。また、ファクシミリというのは最初に新聞社などが新聞の原版を地方の支局に送るために使っていたんですが、それがいつのまにか電話の付属品になっている。

このように日本人が作ってきたものは、専門家や

大企業が使うものを個人が使えるようにしてきた。それはビデオカメラも同じです。簡単にいうと、日本は英才もいない鈍才もいない、したがって誰でも使えるものをつくってきた。それは日本の技術に対する貢献のひとつの形であろうかと思います。少なくともそれをやってきたのは、ここにいる敗戦を知っている世代が終身雇用とか、年功序列とか、皆足なみを揃えて、同じ生活をしよう、同じ権利を分かち合おうという同志愛があったような気がします。私はこのような考えは基本的に間違いないと思っています。

ところがITに代表される先端的な技術というのはひとりひとりの能力とは無関係に発達している。その性能を使い切っていない。必要のない機能が多すぎる。あれはアメリカ人が作っているからです。ですから、我々の生活に馴染ませるように誰でもが扱えるものをつくる。そのような形で伝統工芸と高度なITを一面において伸ばしていきながら、その谷間を埋める、それが例えば日本的な文明のひとつの方向であろうかと思います。秀才達がどんどん高度なIT技術をつくっていくでしょう。一方、東大法学部を出たのにバイオリンを作りたいという妙な人がいます。そういう変人が日本の経済力を背景に、親の経済力をあてにして、伝統工芸にいそしむかもしれない。そういう変人と秀才との間を埋めて相対的なレベルを上げる、それがこれからの日本のあり方であり、物資の最低限と技術の最高を極めたという我々の世代こそが、若い世代の秀才と変人に語りかけて、そしてレベルを上げる。それが多分近い将来21世紀に世界のひとつの力になっていくのではないかと私は期待します。

従いましてこれから先、老人と言われている人達は落ち込むことなく、自分達の家庭の中において、また社会においても自分達の果たすべき積極的な面を探し、そして秀才、変人達を助けて、幕末のよ

うな、第二次大戦の時のような大きな挫折がなく、この困難を立派に次の世代がのり越えるようにしてあげるべきではないかという気がします。時間がきましたので終わります。何か質疑応答があるそうですから、質問がある方はどうぞお願いします。

【司会者】先生の方からおっしゃられましたように、せっかくの機会でございます。質問のある方、ぜひ挙手をお願いします。



【質問者】先生がおっしゃられた秀才と変人の定義をお教え願えませんでしょうか。

【三浦先生】秀才というのは、答えのある問題はきちんと解ける人ということです。例えば現代国語というのがありますが、2000字ぐらいの文章を読ませて、ここで作者が言おうとしているのはA、B、C、D、のどちらかを選べとか、この文章に題を付けたらどれがいいか、ア、イ、ウ、エ、の中から選べなどというものです。たまたまある大学の入学試験に遠藤周作の文章が出まして、この中で作者がいわんとしているのはどれかというのがA、B、C、Dというのがありまして、遠藤はそれをみまして、どれを見ても○だというわけです。ですけども、現代国語の試験の場合はどれかを選ばなければならない。大事なことはテキストの中身よりも出題者がどう答えて欲しいかということを考えなければならない。組織の中でもこの上役にはどう対処すればいいかということがわかる秀才が出世するわけです。秀才というのは、当面している人間にどう対処したらいいかということを知っている人です。変人というのは、戦争中にマルクスの文献みたいなものをみんなで

読んだことがあるんですが、その時一人が、これは革命の本だが、考えようによっては金儲けの本である。これを実践すれば資本家になって金儲けができるはずだ。しかし、こんなのは金儲けのテキストとしては役に立たない。だからマルクス主義はダメだ。こんな読み方をするのはマルクス学者の秀才ではないトデモナイ変人なわけです。変人というのは、学校の成績がどうであろうとも、妙なことにこだわる。そしてそのこだわりに頑固にしがみつく。芸術家というのは大体変人ですが、そういうような人たち、100人に99人はダメなんです、その中に一人面白い人がいる。その人がやったことは大きな成果を生む。去年ノーベル賞をもらった小柴さん、田中さんもそういう意味で変人だと思います。けして絵に描いたような秀才ではない。世の中がうまく回っていくためには秀才が必要です。そして少数の変人が新しい分野を切り開く。秀才99人に変人はひとりでもいいかもしれません。組織の中では少数の変人が必要。老人が変人としての示唆を与えるべきだと申し上げたい。



